

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401,044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第128号



明けまして、おめでとうございます
本年もよろしく願いたします

柿生郷土史料館

館長 財田 信之

今年の4月をもって「平成」が終わります。この平成30年間は、昭和と比べ半分の長さですが、いろいろなことが急速に進んだ時代でした。

私は、昭和生まれなので、昭和時代の家庭の様子を振り返ってみますと、この家にも居間にはちゃぶ台があり、テレビはチャンネル式で白黒テレビなのになぜかカラーに見えるという青いシールドがついていました。アイロンはすごく重く、洗濯機の横にはローラーの絞り器がついており、夜は蚊に刺されないように蚊帳がつってありました。昭和は、戦争があり激動の時代と言われていますが、今と比べると時間がゆっくりと流れ、おらかなことが多かったように思います。

平成は、アメリカで起きた同時多発テロや地下鉄サリン事件などテロが多く起こり、さらに、阪神淡路と東日本大震災と2度も巨大地震が発生するなど自然災害も多く起きた時代でした。そして、コンピュータやインターネットなどにより、昔、手塚治虫が描いていた未来都市に出てくる車やバイクが日常的に空を飛ぶのも目の前で、様々なことが急速に発展した時代でもありました。

このような時代だからこそ、新しいことばかりに目を向けるのではなく、柿生文化で学ばせていただいたように、過去を振り返り、未来を見据え、新たな年に向かっていかなければならないと思っています。

今年もよろしく願いたします。

草創期の 柿生中学校 - 3

開校時の生徒と先生

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

1947(昭和 22)年に開校した柿生中学校に、入学した生徒は何人だったのでしょうか。柿生中学校には、昭和 22年 3月に区域内の小学校を卒業した子どもたち、ほぼ全員が入学しました(現在と違って、当時は私立中学校へ進学する生徒は例外中の例外でした)。『柿生中学校 20年の記録』によると、入学した新1年生は99名でした。

しかしながら、99名の新1年生は、柿中の1期生ではなく、2期生とされました。そうなんです。昭和22年度に、新制柿生中学校に入学した生徒には、3年生こそいなかったのですが、1年生と共に2年生もいたのです。何故でしょう。それは、当時の小学校には1年生から6年生までの義務教育部門と別に、2年制の高等科(高等小学校)が設けられていたのです。この高等科は、義務教育としての新制中学校の誕生に伴って、役割を終え廃止されることになっていました。

高等科2年生は3月に卒業しました。問題は1年生でした。彼ら彼女らは、高等科の2年生に進級するはずだったのに、突然学校がなくなったのです。そこで日本政府とGHQは、高等科1年生については、新制中学校の2年生として入学する事を認め、ただし中学校2年生として入学するか、高等科1年修了で中退するかは自由としたのです。

こうして、新2年生が新制中学校の1期生となったのです。柿生中学校では、76名の2年生が、高等科からの転向組として、最上級生となりました。小学校6年の課程を終えて、高等科に進まなかった生徒も勿論おりました。しかし、東京に近い地の利を生かして、商品経済の発達していた柿生地区では、親たちの教育に対する理解は進んでおり、6年制の尋常小学校卒業生の大部分が、高等科に進学していたのです。その結果、高等科を1年で中退し、新制中学校に進まなかった生徒は、4人に1人くらいの割合だったようです。ただ、この高等科の2年次のつもりで、新制中学校の2年生になった生徒もいたようで、3年生に進級した1期生は61名と、実に15名もの生徒が3年に進まず中退と、中退率が飛びぬけて高かったことも事実です。さらに3年次の途中で、3名が退学。第1回の卒業生は58名に留まったのです。(4ページに続く)

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第98話

法塔様 ー武相お召講ー

小島 一也 (遺稿)

柿生駅前商店街通り(旧津久井往還)に「麻生の法塔様」と呼ばれる大きな石塔があります(右写真)。これは日蓮宗の題目講中が寛政11年(1799)に建立したもので、正面には「南無妙法蓮華經 一天四海皆帰妙法」と刻まれ、右側面には「天下泰平 五穀成就」、左側面に「奉唱満玄題目一万部供養塔」と記されています。この塔は、お題目を一万部奉唱したので建てたとの碑文が池上本門寺38世日棟上人によって揮毫(きごう=毛筆で文字や絵をかくこと)され、台座には、「麻生村 片平村 能ヶ谷村 三輪村 金井村 奈良村 右六村講中」と建立者が記され、その台石には、6ヶ村内各家の先祖200余名の名が綿々と刻まれています。

この六ヶ村題目講中とは、日蓮宗信徒の地縁・血縁による集まりで、後に「武相お召講」と呼ばれるようになります。宗祖日蓮上人は弘安5年(1282)江戸池上の地で入滅され、聖地の池上本門寺は日蓮宗大本山としてよく知られているところですが、その直接的信仰崇拜の対象は、「胎内に聖骨を蔵し、右手に母の遺髪を握り、仏子(ほっす=法具)を持つ日蓮上人座像」(国重要文化財)で、この坐像のお召物は江戸時代、日蓮宗に帰依していた紀州徳川家が奉納していました。明治維新となって、藩主は江戸を去り、紀州家・本門寺から前記講中は坐像お召物調達の依頼を受けます。その理由は、東京に近いこと、古くからの講で活動していること、養蚕の盛んな土地柄であること、などでした。六ヶ村講中をはじめ信徒は「紀州様に代わっての奉納」は誇らしいことであり、武相お召講中を結成、お召物を本門寺に奉じたのは、明治2年のお会式が最初だったそうです。

武相お召講と呼ぶのは、武蔵・相模にわたっての講であるからです。日蓮上人の座像には、夏のお召物と冬のお召物があり、年2回のお召替えがあります。夏のお召物の奉納は前記麻生村を中心とする6ヶ村(約250家)で行います。一方、冬のお召物は町田・森野・鶴間・谷口・函師・木曾村など、現町田市南部から相模原市東部の村12ヶ村(約480家)の連合講中が担当し、毎年10月12日お会式の日に奉納されます。このお会式とは、日蓮上人入滅の前日の日の忌日法要で、新調されたお召物は、信徒数万読経の中で講から貴主に奉納され、坐像は冬の衣服をお召になります。夜は笛鉦・太鼓・まとい・美に飾られた万燈は、次々に境内に繰り出され、夜を徹しての行事となり今でも東京名物となっています。

この秋のお会式と並んで池上本門寺の重要な行事が、4月27日～29日の3日間行われる「千部会」で、この千部会は、お千部とも呼ばれ、日蓮が故郷の安房国清澄山で昇る朝日に向かいお題目を唱えたこの日を開宗の日とし、法華経千部を輪読する法会を言い、この千部会で日蓮坐像は夏の衣服にお召替えになります。4月28日6ヶ村のお召講中代表約40名は、法蓮華経の講旗を掲げお召服を奉納して扇太鼓を打ちお題目を唱えて門前町を進み、中道院(宿坊)で役僧の出迎えを受けて大堂(祖師堂)に入り、貴主を正面にお召講の席が設けられ、本門寺全山の僧の読経の中で、お召服を奉納するのだそうです。現在、講員は減りましたが、お召講中は今も残り、千部会の伝統は生かされています。



(ビデオ「夏のお召服講」より)

このお召物の作製は、通常講元(世話人)の家に信徒ご婦人が集まり、寸法に合わせ最初に講元夫人が針を通し、麻(絹)の単衣2枚、木綿の襦袢2枚、帯1通(夏のお召物の場合)を歓談しながら、2日ほどで仕上げ、仕上げたお召物と曼荼羅(仏様の絵)を掲げてお題目を唱えて終わりますが、このお召講の特徴は、菩提寺や僧侶との関わりがないことで、費用の徴収や作業披露など、すべては自主的に講中によって運営されていることです。

この「麻生の法塔様」と同じ「題目奉唱一万部供養塔」が現町田市金井(三塚)にもあります。これは120段を数える山頂(七面の森)の境内にあり、弘化4年(1847)建立の高さ 1.2m、幅45cmの大型のもので、台座には金井・奈良・能ヶ谷・片平・麻生・三輪6ヶ村名が刻まれ、台座には各村世話人名が列記されており、そのことは、現在供養(葬式)の菩提寺とは異なった、地縁・血縁による先祖供養の集団があったことを物語っています。



シリーズ
教育の歩み 第1部

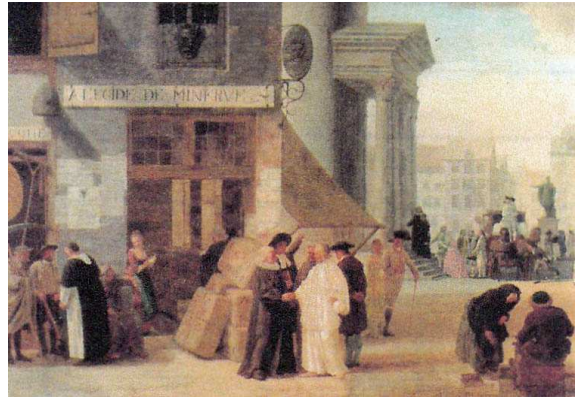
学校の誕生と成長(16)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆書物の役割◆

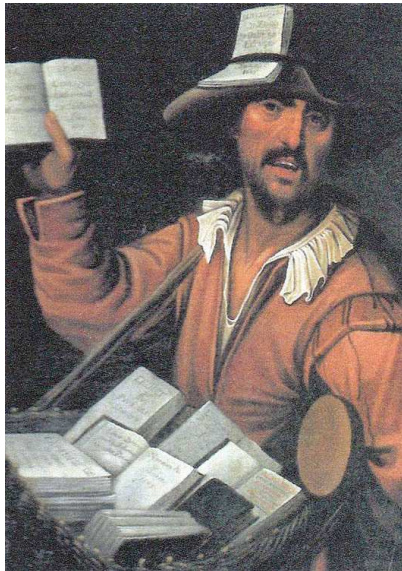
17世紀から18世紀にかけて、ゆっくりとしたペースながら、初等教育が次第に広がりを見せていったのは、王権の側が権力を誇示するために、支配領域の内部を一つの言語(国語)でまとめることに尽力したからでした。と同時に、都市の中間層を中心に、文字を知ること、文字を自在に操ること(文章を書くこと)への欲求が広まったからでもありました。

宗教改革後、プロテスタントとカトリックは、共に信者を教化するために、多くの書物を現地で通用する言語で出版する必要に迫られました。そうした状況の中で、力を強めつつあった各地の王権は、領域内を単一の言語でまとめることに、強い魅力を感じるようになったのです。このことが、王権による「各教区に最低一つの初等学校を」という王令に繋がったのです。実際に、17世紀に入ると、各国の出版業者が発行する書物の中で、ラテン語の書物が占める割合は、急激に減少してゆきます。ルターの改革が定着した16世紀半ばでは、まだラテン語の書物が7割近くと優勢だったのですが、17世紀半ばには、3割程度まで落ち込んでしまっています。各国の出版業者が、国内の読者を意識した出版物の発行に、急速にシフトした様子が目に浮かびます。ここに知識人の国際語であったラテン語の衰退傾向は、誰の眼にも明らかとなったのです。



書籍商の店頭

店の前には各地に送る包みが積み重ねられています。



本の行商人 読みやすい現地語で書かれた廉価本を中心に各地を巡回していました。

急速に発行点数を伸ばした各国語の書物とは、どのようなものだったのでしょうか？特筆されるのが、「青本」と呼ばれた廉価本の出版点数の増加です。日本では、御伽草子などと呼ばれた「黄表紙本」が知られますが、この「黄表紙本」の西欧版とお考えいただいても良いように思います。面白い物語を自分の眼で読みたい。こうした欲求は、文字学習の大きな動機付けになります。今フランスにおける出版点数の変化を追うと、18世紀初頭では200点から300点程度だったものが、世紀半ばには500点程に伸び、1764年から革命の年1789年にかけては、何と1,000点を超えるまでに伸びているのです。しかもこうした出版点数に占める宗教書の割合は、18世紀初頭に40%程度だったものが、革命直前には10%以下にまで落ち込んでしまっているのです。「青本」や科学・技芸書など、世俗的な出版物が奔流のように増えているのです。こうした傾向は、パリばかりでなく、ロンドンやアムステルダム、ベルリンなど大都市の出版事情に共通の現象だったのです。さすがにローマは例外でしたし、地方都市の出版物には、まだ宗教書がそれなりのウエートを持っていたのですが…。

「青本」のサイズ(版型)は次第に小型化し、それに比例するように、値段も安くなって行きました。文字の読みを覚えただけでも、あまり豊かとはいえない人々にも、手にとって時には買ってもらえるようにという、意図が感じられます。ページ数の少ない、粗末な紙に刷られた青色表紙の超廉価本が、大量に流布することで、人々の識字欲を刺激したのです。ここでも教育の普及と、印刷・出版物の発達とは、切っても切れない関係にあったのです。

◆イギリスの中等教育◆

イギリスのケースはどうだったのでしょうか。イギリスで、5,6歳~12,13歳頃までの全児童を対象とした公教育が、無償の義務教育として制度化されるのは、1870年のこととなります。フランスでは1873年ですから、ほとんど差はありません。それ以前の時期には、上流や中流の家庭における初等教育は、お抱えの家庭教師を雇うか、最寄りの個人経営の学校に通わせるかのどちらかでした。上流家庭や上流家庭の仲間入りを目指している中流の上に属する階層の人々にとって、息子にジェントルマンになるために必要な教育を施すことは、大きな関心事だったのです。それには、オックスフォードかケンブリッジで高等教育を受け、その卒業資格を持つことが欠かせぬ条件でした。

従って、オックス・ブリッジの入試に合格するための準備教育、即ち中等教育を受けさせる必要がありました。初期の中等学校は、文法学校(グラマースクール)と呼ばれた学校で、各地の篤志家、とりわけ皇族や大貴族などから提供された寄付金を基金として設立されたことから、基金学校とも呼ばれていました。当時イギリスの大学は、オックスフォードとケンブリッジの2校だけでしたが、文法学校は1868年の調査で、全国に782校も存在したことが明らかになっています。カリキュラムは、文法学校の名の通りで、ラテン語とギリシア語が核となっていました。教育の対象は、あくまでも近隣住民の子弟で、ローカルな存在であることがもう一つの特徴でした。

ところでイギリスの中等教育を語る場合、全寮制のパブリックスクールの存在を落とすわけにはいきません。パブリックスクールもラテン語とギリシア語の教授を中心とする点では、文法学校となんら変わりはなく、文法学校が成長発展した特殊な学校とも呼べるような存在でした。しかし次の2点で、文法学校とは大きく違っていたのです。

(続く)

(1ページより続く) さて、開校初年度の在籍生徒数は、2年生76名と1年生99名です。2年生は38名ずつの2クラス、1年生は、45名と44名の2クラスと、全部で4クラスの学校となりました。柿生小学校が貸してくれた校舎が4教室でしたから、ちょうどピッタリだったのです。狭い物置が職員室も兼ねている有様でした。全てが小学校に間借りです。特別教室もありません。そのため、現在のサープラス柿生の地にあった旧青年学校の校舎を借り、しばらくの間はそちらで家庭科の実習や図工などの授業が行われたのです。大急ぎで走って移動したものと、初期の卒業生の皆様は、口を揃えていらっやいました。食糧難の時代だったのですが、そこは農村地帯の柿生です。食べ物にはさほど不自由しなかったようで、調理実習の時間は楽しみだったそうです。そのため、旧青年学校に置かれた調理室への集合は、飛びぬけて早かったのだそうです。



写真1 一回生の卒業写真(1組)

ところで、先生はどう揃えたのでしょうか。私は第1回に、初期の新制中学校は、先生探しに大変苦勞し、常に先生の不足に悩まされたと書きました。柿生中学校も例外ではありませんでした。『創立70周年記念』誌の38頁~41頁に創立以来の教職員の一覧と在職年次が載っています。それによるとスタート時は職員を含めて9名、内1名は僅か1ヶ月で退職、その穴はようやく9月に埋めています。初期の先生方には、異常なほどの短期間でお辞めになっている先生が多いことに気付かされます。授業がうまくいかず、生徒にソッポを向かれてしまったからなのか、それとも別の事情があったかのどちらかなのでしょうか。どの学校でも似たようなことがあったようです。実力ある先生を揃えることなど、夢のまた夢の時代だったからこそなのでしょう。当然正規の教員免許を取得していない



写真2 昭和23年当時の先生方

臨時雇用の先生も多く、『30年誌』や『40年誌』の記すところでは、「校長先生から、教員免許は後から通信教育で取ればよいから、それまで臨時採用で授業をやってくれと言われて、そのままいついてしまった」と語る先生が、複数いらっやいました。柿生中学ではないのですが、「教育実習に伺ったら、気に入られて、卒業したら正規採用するから、それまで非常勤として授業を持ってほしいと言われ、午前中授業をして、午後は大学に戻ったり、逆に昼の時間に大慌てで中学校に来て、更衣室で学生服から背広に着替えたりした」と語っている先生もおられました。授業しかできなかったでしょうが、そこは若さで補ったのでしょうか。これは校長の荒技になりますが、これはと眼をつけた小学校の先生を引き抜いてしまうケースも散見されました。 続く

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)
1月 6・13・20・27日(毎日曜日) **2月** 2・16・23日(毎土曜日)
 ◎開館時間:午前10時~午後3時 (2月9日は休館です)

明治維新150周年記念 協賛企画 第2弾 協力 町田市立自由民権資料館

**第78回
カルチャーセミナー**

明治10年代の武相地域に 自由民権運動は何をもたらしたのか

「明治維新150年」協賛セミナー第2弾として、町田市立自由民権資料館のご協力を得て「武相地域の自由民権運動」に関する3週連続の講座を開きます。

明治という時代、日本を欧米諸国に負けない国にどう育て上げるか苦闘した中で、イギリス型立憲主義の実現をめざした自由民権運動は一定の成果をあげました。武相地域がそこにどうかかわったかについて、武相困民党の動きを含めて、3回にわけてお話しいたします。

日: 第1日 1月13日(日) 武相地域の民権運動(仮) 講師: 松崎稔氏
 第2日 1月20日(日) 武相困民党(仮) 講師: 杉山弘氏
 第3日 1月27日(日) 三多摩移管(仮) 講師: 井上茂信氏

講師の方々はいずれも町田市立自由民権資料館学芸員

時: 午後1時30分~3時30分 会場: 柿生郷土史料館特別展示室